

きらり 企業

「難聴だからこそ補聴器の良しあしが実感できる」
 横浜市戸塚区で補聴器専門店を営む大槻公孝さん(70)は、難聴に苦しんだ自らの経験とエンジニアとして培った技術を生かし、補聴器の販売や修理を手掛けている。
 アマチュア無線に熱中した高校生の時、自ら組み立てた無線機を友人に自慢すると、「ピー」という高音が混ざっていると指摘されて初めて自身の難聴に気付いた。
 日常生活で不便に感じることはなく、大学卒業後は通信機器メーカーに就職。エンジニアとして変電所で使う遠方監視制御装置の設計などに取り組んだ。夢中で仕事をしているうちに、チームを率いるリーダーにもな

バーナヨコハマおみみショップ

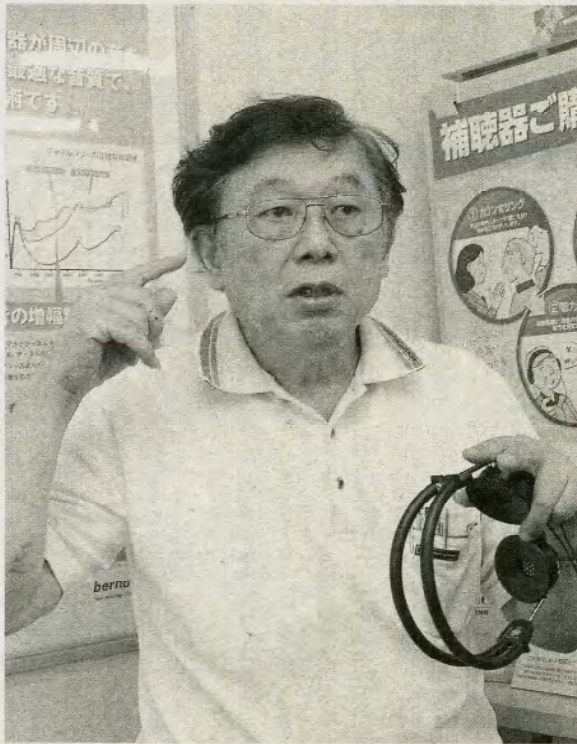
(横浜市戸塚区)

補聴器店 客の心に耳傾け

「値段が高い割には効果のあつた。だが、会社で責任ある立場を任せられるのに伴って難聴も悪化。社内会議が苦痛になった。「社長に何度も聞き返すわけにはいかない。全神経を使って聞こうとしたが、聞き落としが多くなった」と振り返る。働きながら補聴器を探し求め、実際に使用もしたが、

「値段が高い割には効果のあつた。だが、会社で責任ある立場を任せられるのに伴って難聴も悪化。社内会議が苦痛になった」という。
 思い悩んでいた頃、妻がふいに「私も働くから何とかなす。会社をやめたらいいんじゃないの」と言ってくれた。その日のうちに上司に相談し、46歳で20年以上勤めた会社を去った。

退職後は産業用コンピュータを輸入販売する会社をつくった。かつて米国出張した際、コンピュータの活用が急速に広がりがつつある現状を目の当たりにしたためだ。
 そのかたわらで、より良い補聴器を探し続けた。だが、店側に補聴器の性能などを細



2013年、66歳で補聴器専門店「バーナヨコハマおみみショップ」を開業した。
 無線や信号処理などの技術が詰め込まれた補聴器は「精密機械の固まり」といい、特徴を知り抜いて初めて微妙な調整ができるとの考えから、取り扱うのはスイスに本社を置く「パーナフォングループ」が製造するものに限定している。
 「補聴器で補えない難聴もあり、聞こえにくいと感じたらまずは耳鼻科の診察を受けてほしい」と呼びかけている。問い合わせは同店(045・861・8984)。

5年ほど前に都内で開かれた補聴器関連のイベントで、スイスに拠点を置く補聴器メーカーの日本法人社長と知り合った。補聴器専門店開業の夢を打ち明けると、社長は「耳の聞こえない人が補聴器の専門店を開くのはいいことだ」と背中を押してくれた。
 最近の補聴器は精密機器が凝縮され、「人工知能(AI)搭載」をうたう機種もある。元エンジニアとして新技術を理解するのは得意分野だ。持ち前の技術力を生かし、家庭用の補聴器クリーナーなども独自に開発するなど挑戦を続ける日々だ。「耳が聞こえにくくなることで、周囲から孤立するのはつらいことだと身をもって分かる」と話し、「自分の経験を難聴で苦しむ人のために役立てたい」と意気込む。

(阿部真司)

かながわ
経済